

# 島根の古墳が、日本の古代史を解明しつづけている

古墳は、みなさんが思っている以上に身近な存在です。発掘調査された遺跡の中でも多数を占め、発掘と言えは古墳を連想する人も多いはず。この古墳が単なる墓でないことは、この時代が「古墳時代」という一つの時代として扱われていることからわかっていただけると思います。

では島根県の古墳時代とは、どんな様子だったのでしょか。ここでは最新の発掘調査の成果もまじえて、さまざまな事実を紹介していきたいと思えます。実は島根県には日本の古代史を解明するうえで欠かせない古墳もあるのです。



五反田1号墳（安来市門生町）  
安来道路予定地の調査で、径25mの円墳から、長さ約5mの竪穴式石室が現れた。この石室内部は、現地説明会で公開された。5世紀初めごろの古墳。



安養寺墳墓群（安来市西赤江町）  
四隅突出型墳丘墓が2基調査された。3号墓は貼石がよく残っており、いかに丁寧に造られたかがわかる。現在は住宅団地。

## 古墳誕生の謎を解く鍵は、島根にあった

…古墳のさきがけ「四隅突出型墳丘墓」…

古墳がいつから造られ始めたかは、古代史を解明するうえで非常に重要な問題です。弥生時代の終りころ、日本各地で土を小山のように盛り、中に木製の棺を入れた一見、古墳のような墓が盛んに造られ始めます。しかしこの段階ではまだ、各地域でそれぞれ独自の形のもの造っており、古墳時代の前方後円墳のような「全国的に共通した形の墓」は現れていません。

こうしたなか、江の川流域や鳥取県の米子市などで四角形の墳丘の角が突出する奇妙な形をした墓が現れ、やがて出雲市や安来市を中心とする出雲部で発展するようになります。これが四隅突出型墳丘墓と呼ばれる、山陰から北陸にまで共通の形を持つて広がる、「古墳のさきがけ」のような墓です。もし、この四隅突出型墳丘墓がも



仲仙寺墳墓群（安来市西赤江町）写真は10号墓  
四隅突出型墳丘墓が全国的に知られるきっかけとなった墳墓群。当時の研究者たちはこの墓の形を見て、日本の古代史における出雲の重要性をあらためて感じた。現在10号墓は住宅団地になり8、9号墓は史跡公園として保存されている。



前立山遺跡（六日市注連川）  
尾根上に造られた弥生時代中期末ごろ（約1900年前）の溝で区画された墓。現在は中国自動車道。

長曾土墳墓群（安来市黒井田町）  
岡山県の壺が出土。たくさんの墓穴が出てきた。26人以上が葬られていたようだ。



大木権現山1号墳（東出雲町出雲郷）  
「最後の四隅突出型墳丘墓」の1つと考えられている。多数の土器が棺の上から出土した。



っと全国的な広がりを見せていたら、古墳時代は島根県が政治や墓造りの主導権を握って始まったかもしれない。それくらい重要な墓なのです。詳しくは「巻を参照」。

## 木製の棺とお祭りの土器

古墳時代より前、すなわち弥生時代の棺は、木製のものが一般的で、現在では朽ち果ててしまひ、その痕跡しか見ることができません。また、一つの墳丘に100人以上、古墳時代に比べて多数葬られていることが多いのが特徴です。中には他と比べてひとまわり大きな墓穴があり、墓の中心人物の存在がわかる場合もあります。



墳丘のまわりの貼石

棺の上に供えられた土器

的場土墳墓（上・右）

（松江市竹矢町）  
貼石を持つ墳墓で、ここでも岡山産の土器が出土している。今は住宅地。

土器でお祭り  
墓の上からはたくさんの葬式用の土器が出土しますが、基本的には、壺とそれを乗せる器台、そして高坏と呼ばれる器です。さらに四隅突出型墳丘墓には、吉備地方（現在の岡山県）から運ばれてきた大きな壺と器台が伴うことがあり、古代に吉備と出雲が関係を持っていたことを示す数少ない証拠の一つとされています。